

月刊

地域保健

9
2009

● FACE2009

奥田博子さん

国立保健医療科学院公衆衛生看護部看護マネジメント室室長

私の「保健師必要論」

●速報 新型インフルエンザ
神戸市・感染症対策専任保健師の配置



●特集



終わりなき被災体験を未来へのエネルギーに

支援活動を「支援」した、住民たちのあたたかな心

国立保健医療科学院公衆衛生看護部看護マネジメント室室長

奥田 博子 さん

ともすれば、現地から離れた場所に暮らす人々の記憶から、時とともに遠ざかってしまう自然災害ですが、実際に被災された数多くの人の心から、『その日』の出来事が消え去ってしまうことはありません。

「地震災害時における効果的な保健活動の支援体制のあり方に関する検討会」の委員長を務めるなど、自然災害時における保健活動等の研究の第一人者である国立保健医療科学院公衆衛生看護部の奥田博子看護マネジメント室長も、ほかならぬその一人です。

阪神・淡路大震災発生の平成7年1月17日午前5時46分52秒から現在に至る、15年近い時の経過に加え、貴重な体験をお話しいただきました。

その日、その瞬間から 1日の終わりまで

奥田先生の『その日』はどのように始まったのでしょうか。

奥田 私は当時、激震地となつた神戸市東灘区の保健所の保健師でした。その朝は、灘区のマンションでベッドから振り落とされるほどのものすごい揺れで目が覚めました。一時は落下物に挟まれて動けない状態になつたのですが、何とか這い出しました。着の身着のままで外に出て、すぐ目

の前まで来ていた火事の明かりで目に

コンタクトレンズを入れたとたん、真っ赤に燃え広がる火災現場、救急車や消防車を求めて走り回る人々の姿を目にして、恐怖感が増しました。

話しかけられる人もいない雑踏のなか、人の話から情報を集め、「地震」とか「淡路が震源」という言葉が耳に入つた瞬間に、何のことだか分かりませんでした。神戸に地震が起ころう認識がまつたくなかつたからです。なすすべもなく消防局の皆さんのお火活動をながめているうちに辺りが明るくなり

ました。
職場に連絡しようと、長蛇の列の公衆電話に何度も、並び直しても混線でつながらず、お昼過ぎになりました。火は一向に消えず、放置された消防ホースを傾けて、残っているわずかな水をバケツに溜め、皆で火にかけたりと、何かしていないと居ても立ってもらえない、一般市民の感情になつていました。

人が出たという方向に走つてみると、近くのスーパーのガラスを割つて中に入り、物を盗つた人々の話が聞こえ、災害救助法により食料支援があることを知らない一部の住民が、落ち着きを失つていい状況も知りました。日も暮れ始め、近くの避難所が人であふれているという声を耳にして初めて、避難所の存在に思い至りました。

奥田 住み始めて1年の灘区の地理をまったく知らず、皆さんに聞き、近く

私の「保健師必要論」

ましてや一般の住民・国民は保健師の仕事についてよく知らない人が多い。確かに保健師の仕事は見えにくく、表現しきりが、日本が変わろうとしている今、本当に必要なものは何かが厳しく問われている。仕事の内容を正しく知られない不利益は、無視できないものがある。

今月は、日本看護協会会长のインタビューをはじめ、気鋭の論者たちに各自の保健師必要論を展開していただいた。職場の他職種や住民に保健師の仕事を説明する言葉を見つけていただければと思う。

p16 ●日本看護協会・久常節子会長インタビュー
効果を出せる人材の育成を

p24 健康格差を是正する働きに期待

聖路加看護大学 麻原きよみ

p30 保健師という国家資格の伝承の責任

宮城大学 安齋由貴子

p36 なぜ保健師は必要か？

それは公衆の生を護る保健師の機能がオリジナルだから

岡山大学大学院 岡本玲子

p42 物語を論理に変換し地域の健康づくりを推進する

国立保健医療科学院 成木弘子

p46 専門職の目でネットワークを生み出す保健師

その方法論が人々の生を支える

東京大学大学院 村嶋幸代

p52 専門性を問い合わせ続ける保健師

山口大学大学院 守田孝恵

【50音順】



今月の特集タイトルに、違和感を覚えた人も少なからずいるだろう。「保健師が必要なのは自明の理、わざわざ必要論を言わなくても」「必要論の裏には不要論が潜んでいるようで、けしからん」……等々のお叱りを覚悟の上で、あえてこのタイトルをつけた。保健師たるもの、地域の人々に役立っている、必要とされていると思って仕事をしているはずである。ところが政治や行政のパワー・ポストに就いている人たちはもとより、同じ看護職のなかにも「保健師って本当に役に立っているの?」と疑問を持っている人は少なからずいる。



芳川未央さん

島根県浜田市旭支所 市民福祉課

●文・写真

西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

地元の人々と一緒に考え、健康な町づくりをしたい

関心があるのは若者より高齢者、都会より山間部



地元出身だから地域活性化の原動力としても期待されている



保健師を目指す人の話を聞いていて「故郷で働きたい」との希望が多いことに気づく。今回のひよこさんもそんな人だった。

向かったのは島根県浜田市の旭支所。ここは平成の大合併により近隣の浜田市、金城町、三隅町、弥栄村と合併した旧旭町の役場であり、広島県に接する山間の静かな地区である。交通アクセスは鉄道こそないが、車を利用すれば日本海側の浜田市街からこの旭地区を通り広島市へとつながる浜田自動車道を使うことができるため、不便さはありません感じない。いや、それどころか、旭インターを降りる際におしゃれなマンションのような建物が目に入ったから戸惑った。なぜ、こんな山間の地区にこんな建物が？ 不思議に思ってながら支所を訪ねた。

迎えてくれたのは浜田市旭支所市民福祉課の芳川未央さん、26歳。今年3年目を迎えたひよこさんだ。



スポーツに明け暮れた学生時代

冒頭でも触れたように地元の出身であり、支所のすぐ近くに母校の小学校や自宅もある。医療職への憧れはそんな子どもたちに培われたものだった。

「今、両親は梨園で働いていますが、私が保育園から小学3年のころまで、母は老人ホームの寮母として働いていたのです。それで学校の帰りによくホームに寄っていました。そのうちホームで働いている看護師さんの姿を見て、いざうちに、この仕事

事をするなら看護の資格が役立つと分かるようになり、看護師という職業も意識するようになったのです」

小学校、中学校はともに1学年1クラス。小学校ではスイミングスクールに通い、中学ではバレーボル部に所属。活発な子ども時代を過ごした。高校は旧浜田市の県立（普通科）高校に進学し、通学が不便だったので寮生活を選び、今度は水泳部に入部。一貫してスポーツを楽しんだ学生生活だった。

そのうちホームで働いている看護師さんの姿を見て、いざうちに、この仕事

が地元の人々と一緒に考え、健康な町づくりをしたい

関心があるのは若者より高齢者、都会より山間部